

解答

一

問一 ① 夢中 ② 注射 ③ 単純 ④ 省〔いて〕 ⑤ 検査

問二 採集したものに、幼い子どもが自分なりに名前を記し、達成感と優越感を感じているところ。

問三 ア 要領の悪い

イ まじめ一徹の

問四 貧しさゆえに生活に追われ、心のゆとりを失ってしまうのではなく、純すいで何ものにもとらわれない心を持ちながら生きるエネルギーがあったところに、生命力を感じるから。

二

問一 ① オ ② イ ③ エ

問二 村田さんから教えられた詩を復唱することで、幸運が舞い込むと教えられたので、「図書館の彼女」に会えるかもしれないということ。

問三 しおれたひまわりから「図書館の彼女」、また、足形から「ぼく」自身の姿や気持ちを連想したが、今まで経験したことのないもやもやした感情を抱いてとまどっているということ。

問四 はじめは、村田さんが言ったことも、見せてくれたカエルの死骸や雨粒の意味も「ぼく」には理解できなかった。しかし、村田さんが言った通りにして、実際にひまわりや足形を貼りつけてみると、「もやもやを感じた瞬間を採集し、じっくりむきあうことで言葉がうきあがる」という村田さんの言葉の意味がわかった。「ぼく」は、言葉にはならない感情を実感し、他の人には見えない自分だけの持つ深さや豊かさに気づきはじめていたのである。

問五 原始の言葉

解説

一

問二 まず、傍線Ⅰ・Ⅱの二つの話はおよそどこからどこまでなのかを判断し、それぞれの内容を整理します。

傍線Ⅰの話ⅠⅡⅢ段落「9歳ばかりの筆者が昆虫採集をし、飼っていたキリギリスに、ラジオドラマの題名と知ったばかりの英語名を合成し、世界で一番長い名前をつけて、大得意になっていた」

傍線Ⅱの話ⅣⅤⅥ段落「14歳の筆者が植物採集の標本作製し、植物図鑑でラテン語の学名を引き当てて記し、得意満面になっていた」

次に、それぞれの話の共通点を抽出し、つないでいきます。片方の話しか表さないような表現にならないように注意しましょう。

Ⅰ 筆者が子供だったころ／……………Ⅱ 採集をした／……………Ⅲ 自分なりに工夫して名前を記した
Ⅳ 得意になっていた（達成感と優越感を感じていた）

問三

直前の牧野富太郎の本の引用部分の、性格が読み取れそうな部分に着目します。

①「毎日中間の新聞紙をとりかえ」

②「湿った新聞紙は晴天の日に乾かしては乾燥したのととりかえる」

③「赤子のオシメをかえると同様に毎日日課として励行する」

④「植物を一つ一つケンサするく指さき或はピンセットで整える」

⑤「一つ一つの植物に深い愛着が湧いてくる」

⑥「毎日一回或は余暇があれば朝に夕に新聞紙をとりかえて」

次に、それぞれがどのような性格を表しているかを考えます。直後に「しかも貧乏な」とあります。「貧乏」というマイナス表現を「しかも」と添加していることから、もマイナス表現となるようにしましょう。

①③④⑥Ⅱ「まじめ」「一途」「几帳面」「根気強い」「神経質」など→マイナス表現にすると「まじめ一徹」など

②Ⅱ新しい新聞紙を使わず、わざわざ乾かして何度も使うⅡ「要領が悪い」「貧乏」など

⑤ Ⅱ「優しい」など↓プラス表現なので使わない

問四 傍線4という事実に対して、筆者が傍線5のように思う理由を聞かれています。つまり、傍線5のように思うに至る、理由となる筆者の心情を聞かれています。直接書かれていませんので、推察します。

事実（できごと）Ⅱ傍線4「貧しい中、黄色い電灯のもと、狭い部屋で、家族の視線を浴びながら、少年たちは昆虫採集を、植物採集を、つまり何の役にも立たないことを心躍らせて続けたのだ。」さらに前には『そんなことする暇があったら、手伝ってよ！』と叫ぶ母親の声が聞こえてくる」「植物採集が許されるためにもオシメを取り替えるの手伝ったのだ。」とあります。

これを、なぜ傍線5「すこぶる『健全な』こと」と思うのか？

「貧しい中、黄色い電灯のもと、狭い部屋で、家族の視線を浴びながら、」↓ふつうなら、どうなるでしょうか？生活追われてしまい、また、家族への遠慮もあり、「何の役にも立たないこと」などできなくなってしまうでしょう。つまり、心のゆとりを失った状態に追い込まれてしまうはずです。それなのに、「そんなことする暇があったら、手伝ってよ！」母親に言われながら、オシメを取り替えるの手伝ってまでも、「何の役にも立たないこと」を心躍らせて続けたのです。ここに筆者は何を感じて「すこぶる『健全な』こと」だと述べたのでしょうか？「心のゆとりを失わない強さ」「生きる力」「エネルギー」「生命力」を感じたのだと考えられます。

二

問一 ① 直前に「言われてみればたしかに」とありますので、「村田さん」が言ったことを受け、それを肯定する意味となるものを選びます。

② の後に「今この瞬間々なおさら頭の中がざわついてしかたがない」とありますので、「ものすごく」「彼女に会いたくなかった」と推察できます。

③ 前後の内容から足形をとろうとしていることが分かります。しっかり形がとれるように足を引き上げるでしょう。

問二 「ぼく」の心情を聞かれています。直接は書かれていませんので、「できごと」と「リアクション」を手がかりに、推察します。

「できごと」Ⅱ「くつがえされた宝石のような朝、なんびとか戸口にて誰かとささやく、それは神のせいたんの日」という詩を何度も口に出していれば、幸運が舞い込む、と「村田さん」に教わる↓図書館の彼女の横顔が浮かぶ↓復唱するうちに、「村田さん」に教わった詩の朝のイメージが目の前にはつきりうかがうようになる

「リアクション」Ⅱ傍線1「明日の朝、実際に家の玄関に立つてみようと考え、そのアイデアに気を良く」する

① まず、「家の玄関に立つてみよう」というアイデアは、「村田さん」に教わった詩の内容の「なんびとか戸口にてささやく」からの思いつきであると考えられます。よって、「ぼく」が期待しているのは、「なんびとか（誰か）戸口にてささやく」ということが実現することであると考えられます。

② また、「ぼく」が実際に詩を復唱していることから、詩を復唱していれば幸運が舞い込むという「村田さん」の言葉通りになることも期待しているということも考えられます。文中で、「ぼく」が「図書館の彼女」のことをしきりに考えていることから、「ぼく」は「図書館の彼女」に恋をしているのだということが読み取れます。よって、今の「ぼく」にとっての「幸運」とは「図書館の彼女」への恋が成就する方向に向かうことであると考えられます。

①と②をあわせて考えると、①の「なんびとか」は「図書館の彼女」、「戸口にてささやく」は（玄関のところで）会える」「恋が成就する」などということを表していると考えられます。よって、直接の答えは「図書館の彼女に会える」「図書館の彼女への恋が成就する」という内容となります。

問三 「どういうこと」と聞かれていますので、基本的には「言い換え」となります。つまり「不気味なのは今まで見たことのないものだからだ」の言い換え問題だと考えます。①「不気味」②「今まで見たことのないもの」のそれぞれについて、言い換えていきます。

②について。…まず、傍線部直後に「しおれたり枯れてしまったひまわりなら、夏のおわりに何度も見たことがある。人の足形だって、小学校のプールサイドで何十人分も見えた。だけど、こうして白い紙の上に固定された形で見ると、それらはまったく別物のようだった。」とあります。つまり、「見たことがある」にもかかわらず、「今まで見たことのないもの」であると述べることで、「見たことはあるが、まったく別物のように見えた」のだということを表しているのだと考えられます。さらに、「まったく別物のように見えた」では、どのように見えたのかが分からず、あいまいなので、もう少し読み進めます。「ぼくは思った。この足形は、ぼくだ。べたつとしたしまりのないう足形は、つまり、ぼくなんだ。ひまわりを見るたびに彼女を思い出すように、この足形を見ているとく昔の光景だけじゃなく、く今のぼくの気持ちまで、足形に反映されているような気がしてくる。こういう気分をなんと言うのか、ぼくにはわからない。く言葉は知らなくても、気分だけはもうぼくの中にある。まだまやもやした感情だけど、それは実感できる。」とあります。つまり、「足形に自分の姿や気持ちまで反映されているような、言葉では言

い表せないもやもやした気分を味わっている」ということだと読み取れます。

①について。：②のような「もやもやした気分」を実感しながらも、「言葉では言い表せない」ことから生じる、どのような気持ちを表現しているのかを考えます。それは「とまどい」だと考えられます。

①②を言い換えると、「とまどいを感じたのは、足形に自分の姿や気持ちまで反映されているような、言葉では言い表せないもやもやした気分を味わったからだ」となります。

ただし、傍線2には「しおれたひまわりも」とありますので、「足形」のことだけ書くのでは足りません。「しおれたひまわり」から、「図書館の彼女」のことを思うという内容も盛り込みましょう。

よって、「とまどいを感じたのは、足形には自分の姿や気持ちまで反映されているような気がし、しおれたひまわりを見ると図書館の彼女を思い、言葉では言い表せないもやもやした気分を味わったからだ」となります。

問四

まず傍線アとイのちがいをを見るとアⅡ「村田さんの話が理解できていない」イⅡ「実感している」となります。

まずはこれを書きましょう。しかし、これでは傍線をまとめたにすぎないので、「ぼく」の内面の変化、心の成長を聞かれているのだと察し、読み取ります。

12行めで、「村田さん」は「きつと、少年の世界がちよっとだけ広く、深くなるぜ」と言っています。「村田さん」の言う通りにした「ぼく」は、「村田さん」の言う通りに「世界が広く、深くな」ったのだと考えられます。また、「ぼく」が傍線イのように感じた後、(****の後)「村田さん」は「あなたが見れば、他の人間には見えないものが感じられる。あなたの中にある何かかが、すつとよみがえる。それは、あなたの目にも見えないけれど、あなただけはそのものの深さや、豊かさに近づくことができる。」と言っています。つまり、「ぼく」が「もやもやした感情」を感じることができるようになったということは、「自分の中にある深さや豊かさに気づきはじめた」ということなのだと分かります。

答えのベースは「村田さんの話が理解できないでいたが、村田さんのいったことを実感し、自分の中にある深さや豊かさに気づきはじめた」という内容となります。これに「村田さん」の話の内容や「村田さん」が見せてくれたもの、また、少年が変化した理由などを付け加えて字数条件に合うように調整します。